

2024 年度 研究報告

附属竹早小学校

1. 今年度の研究

「教育課程特例校」の申請に基づき、幼小連携して「自己実現活動」の研究に取り組んだ。
協議会や授業提案における教員間における志向のずれを問題の所在とし、「自己実現活動」の起こりや出来事を、教師と子どもの願いの相互作用から分析することで、私たちの現象（ずれ）の分析力や解釈力、そこからの更新力を高めることを目的とした。そして、教師が子どもとの願いのずれを理解し、ずれを解決する具体的な手立てを学びの要素に基づいて打つことができれば（分析力、解釈力、更新力）、子どもは活動への主体性を発揮し、活動は拡張していくと仮説を立てた。

2. 研究の方法

「子どもと教師の相互作用図（以下、相互作用図）」を作成し、教師と子どもの願いを顕在化し、ずれを明らかにすることでそれを解決するための具体的な関りを検討した。また、「学びの対象要素図（以下、対象要素図）」を作成し、「自己実現活動」における学びの価値を教師間で共通理解することで、授業を分析するツールとして役立てた。

3. 研究の記録

実施日	対象学年	提案授業者	テーマ	研究協力者
2024 年 10 月 2 日	第 1 学年	平山 秀人	むかしばなしの世界へ go!	
		窪田 美紀	1 ねん 2 くみで つくるまち	
	第 2 学年	倉次 麻衣	おまつりプロジェクトのゴールをきめよう	
		幸阪 創平	2 の 2 サバイバル村をつくらうプロジェクト	
2024 年 11 月 15 日	第 5 学年	中村 亮太	体験と参加のデザイン	松尾直博教授（本学）
2024 年 12 月 3 日	第 3 学年	鈴木 侑	クリスマスパーティーをひらこう	
	第 5 学年	山田 剛史	どちらを買いますか？	
		田岡 朋子	自分の心や体の距離について考えよう。	
	第 6 学年	曾根 朋之	最後のクラスの活動をつくらう～巨大迷路& (or?) カジノ～	
		高須 みどり	笑いの果てまで行って究！	
2025 年 1 月 31 日	第 2 学年	桐山 卓也	アート造形	松尾直博教授（本学）
2025 年 2 月 4 日	第 4 学年	原田 雄太	楽しめる！4-1 スポーツ開発計画！	大村龍太郎准教授（本学）
2025 年 2 月 10 日	第 3 学年	恒川 徹	戦争や寛容問題のない世界へー自分たちが創る未来ー	
	第 4 学年	徳富 健治	ミュージックデザイン	
		金田 知之	ちょっと変だよ！！生き物の世界	
	第 5 学年	上野 敬弘	ようこそ 5-1 報道局	
		門馬 奈々美	電磁石の極と電流の向きの関係	
2025 年 2 月 18 日	幼稚園	阿部 かほり	遊びの充実	田代幸代教授（共立女子大学）

4. 成果と課題

〈成果〉1 つ目は、「議論の方向性の明確化」である。教員間で議論の方向性や視点がはっきりしてきたことで、特に「子どもの願いを明らかにする」という目的の共有が進んだ。2 つ目は、「主体性の認識と研究方法の進展」である。子どもの主体性を捉えるための観点として「対象要素図」や「相互作用図」が一定程度活用され始め、教師間で共通理解を深めるきっかけになった。3 つ目は、「教員間の価値観の共有と共感」である。実践共有を通じて、教員間で「自己実現活動」に対する共感や意見交換が行われ、活動の価値を再認識する場となった。4 つ目は、「自己実現活動への有意義な視点が生まれたこと」である。子どもと教師の「ずれ」を活動づくりの本質として捉え直す視点が示され、研究の深化に向けた基盤を作ることができた。〈課題〉1 つ目は、「研究の目的の明確化」である。「自己実現活動」の研究が全国に広めるためのものか、独自の取り組みとして行うものの方向性が明確でないため、研究の位置づけに疑問が生じた。2 つ目が、「「対象要素図」と「相互作用図」の活用課題」である。「対象要素図」や「相互作用図」の書き方や解釈に一部混乱が見られた。また、これらの図が「自己実現活動」の本質を説明するためのツールになり得るか課題が残った。3 つ目は、「教師と子どもの願いのずれの検証」である。ずれを解決する具体的な手立てとその因果関係をどのように検証するかが難しく、教師個人の解釈に依存してしまう可能性があった。4 つ目は、「用語の多様性による議論の停滞」である。「ずれ」「願い」「主体性」「学びの要素」など多様な用語の解釈が教員間で統一されず、議論の積み重ねが難しい状況があった。5 つ目は、「研究成果の見える化と共有不足」である。プロトコルや活動提案を共有して議論する場が十分に設けられず、それぞれの成果が全体に活かされる機会が不足してしまった。6 つ目が「主体性の発揮の判断基準の不明確さ」である。子どもの主体性が発揮されているかどうかを捉えるための明確な基準や方法が不明確だったため、研究の成果としての測定が難しかった。